

綿フランネルについて
奈良女大家政 相川佳子

目的 明治・大正・昭和前半期を通じて一般の衣生活の中で広く使用されてきた綿フランネルの、創製から技術的發展、普及および現状を考察する。

方法 各種文献資料によって歴史的変遷と衣生活への浸透の過程、および普及の変遷を解明し、現状に關しては産地に於いて開きとり調査を行った。

結果 綿フランネルは江戸時代後期に石巻や秋田山形等の特産綿織物であり紋羽織の起毛技術を利用して、明治維新以後に開発された新米織物である。それは明治初年の奔別改良に、紋羽織の起毛技術を改良して羊毛フランネルに類似した綿織物を製織することから始った。その後、政府の勸業政策に則って、機械紡績糸の使用、製織の機械化、および図長初の機械操縦の導入が行われるなどの技術的發展は著しく、20世紀初頭には當時の最先端をゆく綿織物となり、羊毛フランネルの代替品として一般の衣生活の中に浸透定着した。普及の理由は得難性、肌ざわり、染色などが輸入の羊毛フランネルに類似していたこと、安価であったことによる。この結果、本来は羊毛フランネルの模造品であったにもかかわらず、いつしか「ネル」の名称が一般化し、名称のみでは素材の識別ができなくなり普及した。しかし第二次大戦後は特に1960年代にはじまる各種合成繊維産業の発達による衣服素材の多様化や生活様式の変化によって、綿フランネルの用途は次第に限られるものとなり、生産額も減少する一方で、かつての綿ネル産地に昔日の活気はない。業者は他の産業の奔馬に需要を怠りてネル加工を行って来るにせず、新用途の開発が求められることは今後の課題は避けられない現状である。